

プリズム

港都・酒田に蘇る
粋と雅び

新田 嘉一

今年二月、江戸時代から続いた酒田の老舗料亭「相馬屋」が、見事に現代の「やすらぎ処」『相馬樓』として生まれ変わった。その伝統を生かしながらも新しい命を吹き込んだ斬新で艶やかな新世界は、忘れていた「粋と雅び」の心を思い起こさせてくれる。

相馬屋は、江戸後期の文化年間（一八〇四～一八一七年）、神社の奉賀帳にその名前が記されるなど、約二百年の歴史を持つ料亭で、画家の竹久夢二や詩人の野口雨情、作曲家の中山晋平、歌手の佐藤千夜子など、その時代時代の文人墨客が訪れている。

明治二十六年には、豪商や政治家が宮中の宴を模した新年宴会を開き、不敬罪で検挙された「相馬屋事件」の舞台ともなっている。

また、現在残る木造の主家は、明治二十七年の庄内大地震の大火で消失した直後に、残った土蔵を取り囲んで建てられたものであるが、平成八年には登録有形文化財（建造物）にも登録されている。

まさに港町・酒田の繁栄を象徴する料亭であった「相馬屋」であるが、経営難から平成七年六月に廃業した。そこで、「酒田の歴史と文化を残さなければ」との思いから、平成十一年四月、競売により平田牧場が一億円で落

札した。そして、さらに巨費を投じ、保存修復工事が始まったのである。

新たな観光資源として「相馬屋」をどう蘇らせるか。そこでデザインプロデュースを金沢市の東茶屋街の旧料亭を修復した実績がある泉椿魚（いずみ・ちんぎよ）氏に依頼した。インテリアデザイナーやエッセイストとしても活躍する泉氏の構想は、「相馬樓を通じて、全国的に酒田の文化を伝えるときに、若い人からも和風文化の良さに触れてもらいたい」というものであった。

土塀は朱塗り、屋根に据え付けた「しゃちほこ」の鬼瓦は、光ファイバーを埋め込んだガラス製で、夜はエメラルドグリーンの蛍火のような明かりを放つなど、最新の技術や伝統的でありながらも斬新な色を用いるなど、「粋と雅び」を演出している。

その外観の茅葺きの門と朱色の塀は、港町の風情漂う舞子坂にマッチさせたものである。門をくぐり扇形の石畳をわたって玄関に入ると、そこには雛飾りを連想する丸い燭台と漆塗りの床、松竹梅と扇・鼓をデザインした金箔のレリーフが迎えてくれる。まさに雅びの世界が、もうそこから始まっているのだ。

一階受付隣にある鉄斎の絵画が飾られた



「くつろぎ処」は、竹林の水墨画の襖や陶製の弾き手など、珈琲や抹茶を楽しむながら鑑賞できるようにしている。現在は雛人形が飾られ、その歴史を感じながら、くつろぐことができる。

さらに、廊下には赤い絨毯が敷き詰められ、壁にはガラスのレリーフや扇をかたどった照明など、随所に繊細な意匠が凝らされ、相馬樓全体がまるで迷宮の館のように人を魅了するのである。

港都・酒田に「粋と雅び」をもって開かれた相馬樓。今、まさに次代の風は吹き、その歴史と伝統が新たな文化として再び蘇ったのである。

（平田牧場代表取締役会長・酒田市）